

氏名(本籍地)	LE CAM NHUNG (ベトナム)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	甲第75号		
学位授与年月日	平成28年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当		
論文題目	ベトナム人日本語学習者の産出文章に見られる視点の表し方及びその指導法に関する研究—学習者の〈気づき〉を重視する指導法を中心に—		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学特任教授	石橋 玲子
	(副査)	昭和女子大学教授	金子 朝子
		昭和女子大学特命教授	鈴木 洋子
		茨城大学教授	村上 雄太郎

論文要旨

認知言語学では、視点は言語主体(話者)の事態把握の仕方が反映するものであると捉えられる。外国人日本語学習者は日本語母語話者とは事態の把握が異なることで、視点の表し方が異なり、日本語の産出文章に不自然さが起こると先行研究では指摘されている。

本論文は、近年、国家間の経済関係などが強化され、高度な日本語運用力を持つ人材の育成が期待されているベトナムにおいて日本語を学ぶ学習者の日本語の産出文章に見られる視点の表し方を調査、分析、考察し、ベトナム語母語話者の事態把握の仕方を明らかにすることを目的としている。さらに、学習者に視点を意識化させるために第二言語習得の認知プロセスの〈気づき〉を重視した指導法を実験し、その効果から視点指導のモデルを提案している。本論文の構成は、全体で8章からなる。

第1章の序論では、研究の背景と研究の目的を簡潔に述べている。研究の背景では、外国人日本語学習者のメールや作文などの産出文章に不自然さや分かりにくさがある原因の一つは、視点の表し方や一貫性が日本語母語話者と異なることにあるとする先行研究の結果を記述している。これは認知言語学の概念である事態把握が主観的であるか客観的であるかに関連することから、認知言語学の理論言語学者(大江、池上など)の見解に触れ、事態把握における視点の概念を紹介している。第二言語習得の研究では、英語や中国語などを母語とする学習者は客観的な事態把握をする傾向にある例をあげている。しかし、ベトナム語での事態把握やベトナム語を母語とする学習者の視点の表し方についての実証的研究は今までなされていない。そこで、本論文では、ベトナム語における事態把握の解明、ベトナム人日本語学習者の産出文章に見られる視点の表し方の実証研究及びその指導として気づきを重視した視点指導の実験とその効果を測ることを目的とする。

第2章では、視点の概念についての認知言語学及び第二言語習得の先行研究を詳細に取り上げ、概説している。まず、認知言語学から大江（1975）を取り上げ、ある出来事を話し手が外からではなく自ら当事者として直接的に捉え描く「主観性」の概念、話し手は話し手にとって近い人におくとする「視線の軸」概念を説明している。久野（1978）では視点をどこから見るかのカメラアングルであり、単一文には単一のカメラアングルであるとし、視点の一貫性を唱えている。佐伯（1978）らは視点を視座（対象を見る眼の位置）と注視点（その視座から眺めた時に注目される対象の側面や属性）などに分け、日本語では視座は固定しなければならないとしている。第二言語習得研究では、学習者の視座、または注視点の捉え方に関する研究の研究手法、分析方法、結果を的確にまとめ概説している。先行研究を参考に本論文での視点を、視座（話者の見る立場）と注視点は（話者の見る対象）から捉えること、また、視座は視点表現（受身、授受、移動など）から判定し、注視点は主語により判定すると明確にしている。

第3章では、本論文の視点、視点指導の理論的枠組みについて論述している。認知言語学では視点は物事（事態）に対する話者の捉え方を反映するものである。事態把握には話者を事態の中に置く主観的事態把握と話者は事態の外に身を置く客観的事態把握があり、言語により好まれる事態把握が異なるとされている（池上 2003、2004、2006）。視点指導の研究手法として、第二言語習得の認知プロセス（気づき→理解→内在化→統合）の気づきを取り上げ、シュミットの「気づき仮説」により言語習得におけるその役割と重要性を指摘している。第4章から第6章までは研究1から研究3について論じている。

第4章の研究1では、ベトナム人学習者の母語であるベトナム語と日本語の視点の表し方を日本語の小説とそのベトナム語訳から比較している。その結果、ベトナム語には視座の一貫性の制約がないこと、注視点の明示性が強いことを明らかにしている。このことは、客観的事態把握をする言語の特徴に類似しており、ベトナム語は日本語のように主観的事態把握の言語ではなく客観的事態把握に近い言語であると指摘している。

第5章では研究2について記述している。研究2では、ベトナム人日本語学習者を対象に漫画の物語描写による産出文章における視点の表し方を分析している。ベトナム人学習者は日本語の習熟レベルにより上位群、下位群に分け、日本語母語話者の産出した文章と比較している。また、母語の影響を検討するために日本語学習歴のないベトナム人によるベトナム語での産出文章を収集している。それらの産出文章における視点の表し方を視座と注視点から分析した結果、ベトナム人学習者の産出文章には、視座に関して一貫性が弱いこと、中立的視座も多いこと、視座を表す視点表現が日本語母語話者と異なり授受表現や移動表現が少なく感情表現が多かったこと、注視点の主語に関しては、主語が明示的で、固定の傾向にないことが判明した。また、ベトナム人学習者の下位群とベトナム人の母語での産出文章には視点の表し方に共通点があり、ベトナム人学習者の産出文章には母語の影響が示唆され、視点の一貫性の意識が欠如している可能性を指摘している。

第6章では研究3について記述している。研究3では、ベトナム人学習者に視点の一貫

性などの意識化を促進するため、第二言語習得の認知プロセスの気づきを重視する指導を綿密な実験計画のもとで実験している。気づきの手続きとして日本語母語話者とベトナム人学習者の物語描写の産出文章を比較させている。気づき指導は、学習者一人の気づき、グループディスカッションでの気づきの共有、教師の非明示的介入を実施している。この気づき群と教師の明示的説明のみの群及び気づきのプロセスと教師の明示的説明を組み合わせた結合群の3群で産出文章を視点の表し方で比較し、視点指導の効果を検討している。さらに、効果の持続を見るために産出文章による遅延産出テストを実施している。その結果、視点の指導では教師の明示的説明はほとんど効果がなく、気づきのみまたは気づきを組み込んだ結合指導に効果があった。しかし、学習者の気づきのみでは、視点表現、主語の非明示など言語の表層レベルでは母語話者の産出文章に近づく効果が認められたが、話者の見る立場を表す視座の一貫性については教師の明示的説明が必要であることを明らかにした。

第7章では、以上の研究結果からベトナム人日本語学習者の産出文章に見られる視点の表し方について総合的考察を行っている。認知言語学の「主観性」の観点から母語話者との違いを、また、第二言語習得の観点から学習者主体の気づき指導のモデル図を提案している。

第8章の結論では、結果のまとめ、視点指導の知見からの日本語教育への示唆を提示し、今後の課題をあげている。

論文審査結果の要旨

近年、日本とベトナムとの経済活動などの活発化から、ベトナムにおける高度な人材育成が望まれている。人材には専門的な知識だけでなく、高度に運用できる日本語能力の必要性も高まり、2014年の日本学生支援機構の調査では、日本国内の留学生数が中国に次ぎ、第2位にランクアップされている。このようにベトナムにおける日本語力の必要性と学習者の急増が観察されているが、ベトナム語を母語とする日本語学習者を対象とした研究は少なく、学習者の日本語習得の困難点についてはほとんど明らかにされていない。

本論文は、ベトナムの大学で日本語指導に従事している執筆者が、文法や語彙などが高度に習得されているベトナム人学習者の日本語の産出文章に不自然さが指摘されることに着目し、その原因は、外国人学習者を対象とした先行研究から認知言語学の概念である事態把握に関わる視点の表し方が日本人と異なるのではないかと仮説をたて、その検証を試み、ベトナム人日本語学習者の事態把握の解明とその指導を目的としている。視点は、言語主体である話者の事態把握の仕方を反映するものであるとされる。本論文では、事態把握における視点の概念及び外国人日本語学習者対象の視点研究の先行研究を詳細にかつ

的確に概説した上で、視点を視座（話者の見る立場）と注視点（話者の見る対象）から捉えること、視座については視点表現（受身表現、授受表現、使役表現、移動表現、主観表現、感情表現）から判定し視座の一貫性を見ること、注視点については、主語の明示・非明示、主語の固定・移動により分析することを明確にしている。まず、研究1では、ベトナム人学習者の母語であるベトナム語の視点の表し方を明らかにするために、日本語の小説とそのベトナム語訳における視点の表し方を比較している。ついで、研究2では、ベトナム人学習者の産出文章における視点の表し方の特徴をみるために、漫画の物語描写による産出文章を日本語母語話者の産出文章と視座及び注視点から綿密に比較し、検討している。その結果、視点を表す視点表現や視座の一貫性の欠如、注視点である主語の明示化、主語の移動の傾向などから、ベトナム人学習者の産出文章に見られる事態把握が主観的事態把握の傾向にある日本語母語話者と異なり、客観的事態把握の傾向にあること、視点の一貫性の意識がない可能性を示唆した。さらに、本論文は、従来研究されてこなかった視点の指導法を試みている。視点の一貫性などの意識化を促進するために第二言語習得の認知プロセスの〈気づき〉を利用した実験計画のもと指導の実験を試み、学習者の〈気づき〉を重視した視点指導の効果を明らかにしている。

以上より、本論文の知見は独自であり、次の点で意義が高く評価される。

(1) 視点に関するベトナム語と日本語の対照研究への寄与

従来、ベトナム語と日本語の対照研究はなされてきているが、言語形式の構文研究などが中心であり、事態把握に関わる視点での言語の比較は初めてである。

(2) ベトナムでの日本語教育及び日本語教育全体への寄与

ベトナムでの高度な日本語能力の養成には、自然な日本語、日本人が好む日本語の習得は重要であり、ベトナム人学習者の視点の表し方の特徴を明らかにしたことで、視点の一貫性などの意識がない学習者への気づき重視の指導は大きな効果をもたらすことが期待される。また、視点の気づきを重視した学習者主体の指導モデルは日本語教育全体への貢献度も高い。

(3) 客観的事態把握の傾向にある言語を母語とする他の外国人学習者への視点教育の可能性

日本人の主観的事態把握と異なる事態把握をする言語を母語とする学習者への視点教育へもその効果が期待される。

(4) 第二言語習得の指導研究への貢献

第二言語習得で気づきの役割は指摘されてきたが、学習者の気づきを重視した指導法での効果の検証は少ない。本研究では視点のように事態の把握に関わる学習事項での気づきの役割及び効果を実証しており、第二言語習得の指導研究への貢献も大である。

以上のように、本論文の結果はその独自性だけでなく上記の分野への貢献が大いに期待され、研究の意義は非常に高いと考えられるが、視点の表し方は日本語を基準としており、

ベトナム語での事態把握は別の表現を取る可能性もあること、また、気づきの指導も効果を産出文章で判定したが、気づきには産出に至らないが、気づいているレベルもあるのではないかとの指摘もなされた。しかし、本論文の研究はベトナム語と日本語を視点の観点から初めて比較したものであり、事態把握が異なる言語話者への視点指導の試みと、論文全体を通じての緻密な分析と考察は、研究の質や意義を損なうものではないと考える。

本論文の審査は、学外を含む4名の審査員により行われた。審査員の専門はベトナム語と日本語の対照研究、日本語教育、英語教育における第二言語習得研究であり、審査会は3回実施された。第1回の審査会では、ベトナム語の視点表現及び第二言語の気づきについての論述に一部明確さが必要との指摘がなされた。第2回の審査会は、第1回の指摘に基づき修正された論文の修正箇所を確認を行い、第3回の公開審査会の実施となった。

以上の審査を経て、本論文は、審査員一同、博士（文学）の学位を授与するに十分ふさわしい意欲的な内容であると、全員一致で認めた。